# 制度化と記号創発——後期メルロ＝ポンティを基盤とした記号創発システム論の再構築

久保田 はな（立命館大学）

**発表要旨：**

記号はいかにして新たに生まれ、かつ共同体のなかで安定的に継承されるのか。この問いは記号論の根幹に関わり、既存の記号創発システム論における中心的な課題である。谷口忠大らによる創発的記号システムの研究は、エージェント間の相互作用から記号が動的に発生するプロセスを精緻にモデル化してきた。しかし、創発した記号がなぜ「安定し」「次世代へと引き継がれる」のか——その持続と変形のメカニズムは、いまだ理論的に手薄な領域として残されている。

本発表はこの哲学的基盤として、後期メルロ＝ポンティの制度化（institution）概念を導入することを提案する。メルロ＝ポンティは 1954～55 年のコレージュ・ド・フランス講義録『制度化と受動的綜合』において、「制度化」を次のように定義する。それは過去の経験が単に記憶されるのではなく、身体的実践のなかに沈殿（sédimentation）し、後続する意味実践が引き寄せられる場（champ）を開くプロセスである。この概念は前期の「受動的綜合」より脱中心的・開放的であり、意味が主体を超えて持続しながらも、再活性化（réactivation）によって絶えず変形される点を強調する。

本発表では、この制度化概念を記号創発システム論に接続し、制度的記号創発モデル（Institutional Semiotic Emergence Model）を提案する。第一に、記号創発は単なる「出力」ではなく、後続の意味実践を可能にする場の開口である。第二に、間身体性に基づく身体的沈殿が記号の継承を支えており、それは概念的・言語的レベルに還元されない。第三に、沈殿は固定ではなく再活性化によって変形されることで、記号システムの保守性と創造性が同一の機制から説明される。

事例として、谷口の「コミュニケーションロボットにおける記号創発」実験を参照する。実験においてエージェント間で発生した記号体系は、繰り返しの相互作用を通じて安定するが、同時に環境の変化に応じて漸次的に変形される。この現象は従来「創発と学習の組み合わせ」として説明されてきたが、制度化の概念を用いれば、沈殿・場の開口・再活性化という一つの循環的プロセスとして統一的に記述できる。身体的間主観性の次元を明示的に組み込むことで、「なぜ記号が共有されるのか」という問いにも新たな光が当たる。

本提案の含意は三点ある。第一に、記号創発論に「安定化の哲学的語彙」を与えること。第二に、身体・時間・間主観性を一貫した枠組みで扱うことで、言語記号論と生物記号論をつなぐ中間理論の可能性を自然科学におけるピッツとマカロックの実験をもとに哲学的存在論を展開した開くこと。第三に、AI エージェントにおける記号創発研究に対し、身体性と時間的持続という新たな設計指針を示唆することである。

参考文献

Taniguchi, T., Nagai, T., Nakamura, T., Iwahashi, N., Ogata, T., & Asoh, H. (2016). Symbol emergence in robotics: A survey. Advanced Robotics, 30(11–12), 706–728. https://doi.org/10.1080/01691864.2016.1164622

Taniguchi, T., Ugur, E., Hoffmann, M., Jamone, L., Nagai, T., Rosman, B., Matsuka, T., Iwahashi, N., Oztop, E., Piater, J., & Wörgötter, F. (2019). Symbol emergence in cognitive developmental systems: A survey. IEEE Transactions on Cognitive and Developmental Systems, 11(4), 494–516. https://doi.org/10.1109/TCDS.2018.2867772

谷口忠大. (2010). 『コミュニケーションするロボットは創れるか——記号創発システムへの構成論的アプローチ』. NTT 出版.